連載　千座の置き戸（ちくらのおきど）

第二百六十四回　教育思想の変遷　その四

南出喜久治（令和７年３月 15 日記す）

人類にとつて必要なことは、人類が存続し続けるための規律を守ることである。それには、本能を強化する教育が必要である。

簡単に言へば、本能強化教育といふのは、男が男らしく、女が女らしくさせることである。

男は、強くなれば優しくなれる。女は、優しくなれば綺麗になれる。

これが本能原理であり、これを劣化させると人類は滅亡へと近づく。劣化することは、人類が「老化」することである。個体にも老化があるやうに、人類にも老化はある。

人間の教育といふのは、人類存続のために必要なものであり、それは、大人から子供へと教育によつて伝承することによつて人類の永続できるのである。

LGBT とか同性婚といふのは、人類の劣化現象である。これは、遺伝子による伝承のエラーによつて生ずる老化現象、病理現象であり、このやうな現象は遺伝子による生命継承の生物には必然的に起こり得る。

人間においても、昔から男色などがあつた。ただし、男色は、男だけの戦闘集団に女が入り込むことによる混乱と情報の漏洩を防ぐために人為的に行はれた要素もあつた。

そして、遺伝子のエラーを少なくすることが人類存続のための老化防止に必要なことであり、本能を強化する教育が必須となる。

劣化現象、老化現象を起こして男女の営みができずに子孫を残せない者を称賛すること自体が本能の劣化による人類の滅亡へと向かふことになる。

特に、T（トランスジェンダー）は、いはゆる先進国に特徴的なもので、発展途上国には余り見られないのは、おそらく環境ホルモンや食品添加物によつて起こるホルモン異常や染色体異常によるものと考へられる。

これらの LGBT 現象を過度に保護する左翼リベラル思想といふのは、まさに理性の塊の思想である。

「狂人とは、理性以外のすべてのものを失つた人間である」とチェスタートンが言つたやうに、左翼リベラル思想は、理性の塊に化した人間の異常な思想であり、本能の劣化が招いた病的なものである。ごく少数の病理現象のある者を大多数の正常な者と同等の権利があるとするどころか、逆に少数者の権利は多数者の権利よりも保護されるべきであるとする倒錯したリベラル思想によつて、多数者の権利が少数者保護の思想によつて抑圧される。
しかし、このやうなリベラル思想は本能が劣化した心身障害者を特別に保護するものであると説明すべきであるが、そのやうな見解は全く示されてゐない。
この現象を顰めて嫌悪する人たちの殆どは、道徳論などの理性論で反論するが、これでは反論にならないのである。
つまり、理性論ではなく本能論でなければ説明がつかないのである。

九州大学の名誉教授で医学博士、理学博士の井口潔は、「ヒトの教育の会」を主宰し、この会のキャッチコピーは「『ヒト』は教育によって『人間』になる」といふものである。同会の発行した『人類が向かうべき進化の方向は「無の境地」だった！』といふ著作は、それなりに説得力がある。
井口は、この著作の「はじめに」において、「人間を生物学で直視せよ……教育・道徳の基盤」と書いてゐる。
ヒトは教育によつて人間になるといふのは正しいが、惜しいことに、「人間を生物学で直視せよ」ではなく、「人間を哺乳類の本能原理で直視せよ」とすれば、正鵠を得たものなる。
その意味では、戸塚宏の「脳幹論」に基づく本能論の方がはるかに優れた見解である。

繰り返すが、哺乳類は、卵生ではないので、分娩後の子は直ぐには自立できないので親が教育する。それは、躾であり修身である。これを守らなければ種の団体生活において自立できないのである。生活の基本的な知恵を親が行動によつてお手本を示して教へ込む。それが出来なければ子は自立できない。
つまり、家庭教育が人類が存続するために欠かすことができないのであり、デューイ思想は完全に誤つてゐるのである。これはゴキブリのやうな卵生の昆虫に適用される思想であつて、この思想は、人間にゴキブリの生き方を真似せよと言つてゐるやうなものである。

左翼リベラル思想とはゴキブリの思想なのである。しかも、躾も修身も身に付かないのに、やたらと道徳といふ宗教的な規律を強制する。道徳と呼ばれるもののなかには、宗教的な規範が多い。
聖徳太子の憲法十七条に、篤く三法を敬へといふのはその典型である。このやうなものは、祭祀を無視するものであつて、本能適合性がない。本能適合性があるものが善であり、

それに適合しないものが悪である。

　これを戒められたのが、推古天皇の御詔勅である。

　祭祀は本能に根差すものであるから、「篤く三法を敬へ」を悪であると理解できることが教育において最も必要なことなのである。